

====今月号は4ページ建てでお届けします。====

トピックス 各教室で年度の皆勤精勤表彰

恒例のことですが各教室で昨年4月から本年3月までの1年間の皆勤者と精勤者を以下のとおり表彰して、ささやかな記念品を贈呈しました。

瑞江鶴の会 皆勤賞；類地美津子さん、西山忠さん、精勤賞；渡辺規子さん、佐久間幸子さん、
東大島鶴の会 皆勤賞；網代節子さん、吾妻一子さん、精勤賞；小向彰子さん、中野純子さん、
川口正美さん、白井千春さん、鈴木武さん、

亀戸SC会； 同会は昨年亀戸スポーツセンター閉館後の6月からスタートし、本年5月末を持って終る予定ですので、変則的ですが、この期間を対象として5月末に表彰することといたしました。

また、登録教室ではありませんが、昨年4月に発足した清新南ハイツの熟年者団体「清新くすのきプロバンス会」主催の早朝野外太極拳の会でも年間の精勤者を表彰いたしました。

東大島鶴の会 5周年！

東大島鶴の会が3月末で創立5周年を迎えました。途中から加わった会員もかなり増えましたので、会のTシャツを新調して五周年のお祝いとしました。【新調のTシャツで記念撮影】



第13回太極拳祭りに参加

中野完二先生一門の関係教室による第13回太極拳祭りがさる3月24日に台東リバーサイドスポーツセンターで40教室525人が参加して開催されました。私も本部道場中野教室の一員として参加し、皆さんと終日楽しく交流してまいりました。【写真提供； 踏澤徹師範】



亀戸スポーツセンター教室再開決まる

昨年6月に大規模修繕のため閉館されていた亀戸スポーツセンターが近く修繕を終えて5月末に再開することが決まり、同時にセンター主催での「健康太極拳教室」の再開も決まったようです。近く江東区報などで募集要領が発表される予定です。

閉館中は皆さんで自主サークル『亀戸SC会』を結成して江東区青少年センターで練習を続けてきましたが、その甲斐があって6月からは新装成ったスポーツセンターでの新教室に戻る事が出来る見通しがつきました。

閑人閑話 木村政彦をご存知ですか？

最近すごい本を読みました。「木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか」(増田俊也著・新潮社)というたいへん物騒な名前の本です。厚さ 4.5 センチ、701 ページに及ぶ大作ですが内容がまたすごい。新聞の書評でも取り上げられています、たいへん売れているようです。

“15年無敗、13年連続日本一、そして紀元2600年天覧試合優勝、日本柔道史上「最強」の男が背負った悲しき人生”というのはこの本の帯封の言葉ですが、その男が木村政彦(1917~1993)なのです。

昭和29年(1954年)12月22日のプロレス戦で本来八百長戦のはずが力道山の裏切りによってわずか15分でマットに沈んだ木村政彦。これを期に力道山は美空ひばりと並ぶ国民的英雄に駆け上り、一方の木村政彦は柔道界の恥さらしと鞭打たれ、怨念と慙愧に身を焼かれながら海外への流亡を余儀なくさせられる。ふたりの人生の交錯はあまりにもドラマチックであったのです。

当時からプロレス興行は全国のやくざ、暴力団が完全に仕切っていたこと、新聞では朝日と毎日がそれぞれ木村政彦組、力道山組に分かれて応援していたこと、放映が始まったばかりのテレビはなんとNHKと日本テレビが生中継したことなど、いまから考えるとビックリすることが載っています。

この本を読むとまた、日本の柔道史、とくに裏面史を知ることにも出来ます。戦前における立ち技系の講道館柔道と寝技系の高専柔道との理念や戦法の違い、そして敗戦後、柔道は武道ではなくスポーツであるとしてGHQの認可を得ることによって講道館派が日本の柔道界を牛耳る体制が確立したこと、ここからはじき出された、あるいはこれに飽き足らない柔道家がプロ化したり、海外にスピアウトしたりしたこと。それによって欧米や南米などで柔道が普及し、レベルが上がったこと。その象徴的な一戦が1964年の東京オリンピック柔道、無差別級で神永昭夫がヘーシングに敗れた決勝戦であることなどをすることも出来ました。

日本では忘れ去られていた木村政彦の名前は1993年11月、彼が故郷の熊本でひっそりと死んだわずか7ヵ月後に、思わぬ人間の発言によってふたたび蘇るのですが、これがまたたいへんなドラマなのです。それは米国コロラド州デンバーで開催された第1回のUFC大会でのことです。UFCとは「Ultimate Fighting Championship」、つまり何でもありの真剣勝負の異種格闘技の世界大会のことですが、ボクサー、空手、プロレスラーなどとの死闘を勝ち抜いて優勝したのは、当時世界に未だ良く知られていなかった、グレイシー柔術で戦ったブラジル人青年ホイスグレイシーでした。彼は第2回、第4回大会でも優勝し、さらには彼の兄弟たちも活躍するようになって一躍グレイシー柔術、グレイシー一族の強さは世界中の格闘家や格闘技ファンたちに知られるようになります。

ホイスグレイシーはこの試合の後、マスコミに対して“グレイシー一族にとってマサヒコ・キムラは特別な存在です”と発言しました。なぜか、それは約40年前の1951年に首都リオデジャネイロで行われた木村政彦と父親エリオグレイシーとの決闘にあります。双方国威を賭けての勝負だったのですが、結果は木村政彦の腕ひしぎによる完勝。しかし左腕を折られても最後までタップ(参った)しなかったエリオの勇気と根性、そしてそれまであまたの日本人柔道家を蹴散らしてきたエリオを鮮やかに倒したキムラの技量の高さがブラジル人と在住の日系人のともに賞賛するところとなったのです。一族ではこの日を“マラカナン屈辱”と呼ぶとともに、木村政彦の腕がらみの技をキムラロックあるいは単にキムラと呼んで伝承しているといわれています。



もともと父親のガスタオンの依頼でエリオや兄弟たちに柔道を教えたのは日本人の講道館出身の前田光世であることがまた何か因縁めいていて面白い、と話してゆくときりが無いし、そもそも木村政彦がかくも強い柔道家になった経緯やその破天荒な生き様などを紹介しようとするばさらにきりが無いのでこのあたりで終わりにします。とにかく面白い本でした。

左顧右盼～さこ・うべん～（58）

今月からしばらく、広義の「中国武術（拳法）」に関する話題を数回にわたり取り上げてゆきます。その後再び太極拳にかかわる話題に戻る予定です。

【第10話 百花繚乱の中国拳法 清朝末から民国時代へ】

中国には現在いろいろな流派の武術、拳法が存在していますが、その多くは明朝末から清朝、そして民国時代にかけて発展してきたものといわれています。その源流のひとつは下記する「少林寺武術」であり、もうひとつが宋の太宗趙匡胤の拳法にあることは以前「太極拳の源流を辿る」で書きました。その趙匡胤の拳法が元を倒した漢民族の明朝になって再評価されて、武將戚繼光の「拳経」に結実したこともご紹介しました。その序文には『古今に知られた門派としては、まず宋の太祖の32勢の長拳がある。また六歩拳、猴拳、^か函拳なども有名であるが、技法的に見れば実は大同小異である』と断じたうえで、さらに現代（明代）の各派の武器術から拳法までを論じ、要はそれぞれの得意技があるということで、これらの長所を集めれば最強のものになるとして、選りすぐった拳法32勢の技法を紹介しています。これは当時としては画期的な拳法書です。この32勢には、おなじみの探馬や単鞭も含まれていますが、陳王廷の陳家に伝わる拳譜にはこの中の29勢が含まれていたということです。

中国は国土も広く、民族、宗教も多岐にわたっていますので、地域によってそれぞれ独自の拳法があったのは間違いの無いところですが、やはり、この「拳経」や歴史の古い「少林拳」などが、明代以降次第に各地方に伝播し、そこでまた変身し、相互に影響を受けながら複雑に発展していったものと見るのが正しいようです。「太極拳」もまさにその中のひとつの門派であるといえます。

今回は、清朝末ごろから中華民国時代を経て新中国成立ごろまでの中国拳法の主要流派やその創始者、継承者の歴史を、そして相互の関連性を、ごくごくかいつまんで検証してみました。

1) 嵩山少林寺拳

もっとも歴史も古く、影響力も大きかったのはやはり嵩山少林寺拳といわれています。とくに清朝になってからは、滅満復明を志す志士たちが、少林寺に潜伏するなどしたため、清朝政府からしばしば弾圧を受け、その都度僧兵たちは各地へ逃れて隠れ潜んだと言われていますが、それはまた少林寺武術の地方への拡散と伝播に繋がったようです。南少林寺伝説などもそのひとつとされています。

少林寺武術の特徴は武器術、拳法とも大変種類が多く、拳法にも長拳（打）と短打の2系統がありますし、また内功法も外功法もあります。これから述べる各流派の拳法も多くはこの少林寺拳法の影響を受けているとされているゆえんです。

2) 太極拳

（太極拳に関しては第8話でも取り上げていますので、ここでは省略いたします。）

3) 形意拳（心意拳・心意六合拳）

山西省が発祥とされ当初は心意拳と呼ばれていたが後世になって形意拳と呼ばれるようになったもので（音は同一）、始祖は明代の姫際可とされています。姫際可は後年嵩山少林寺に10年ほど滞在し

て心意拳を伝えたとの説もあります。(現に少林寺には**心意把**と呼ばれる拳が伝承されているそうです。)

河南省洛陽の回族・**馬学礼**(1715?~1790?)が、ある隠者から授かり、河南省の回族に伝承してきたものを**心意六合拳**と呼んでいます。近年では上海に出てきて漢族にも指導した**慮嵩高**(1873~1962)がそのあまりに過激な拳技で心意六合拳の名を挙げたとされています。

姫際可の拳はさらに他の地方でも継承されましたが、河北省の**李洛能**(1808~1890)が**形意拳**と名乗って理論も技法もさらに洗練されたものになります。河北派と呼ばれる中では**李存義**(1847~1921)、**郭雲深**(1820~1901)、**尚雲祥**(1864~1937)などが有名で、当初郭雲深に冠せられていた“半歩崩拳あまねく天下を打つ”という賛辞を後には尚雲祥が引き継ぐことになったといわれています。

山西派では李洛能から直接学んだ**車毅齋**(1833~1914)が有名で、試合を挑んで敗れた郭雲深をして“自分の形意拳は剛健な力量型だが、車の拳は軽靈で技巧的である”と賞賛したといわれています。

形意拳は陰陽五行説を理論に据えているところに特徴があり、五行拳、十二形拳などの異なる套路があります。また後ろ七分、前三分で構えるいわゆる「**三体式**」が基礎的な鍛錬(つまり**站樁功**)として知られていますが、実戦的には、そこから後ろ足を引き寄せつついきにくく「**崩拳**」の威力で知られています。

4) 八卦掌

清朝の宦官**董海川**(1813?~1882)が創設したのが八卦掌です。八卦掌は文字通り拳ではなく掌で闘うこと、また円周上を歩いたりする独特の歩法で有名です。道教の修法を取り入れたものとも言われていますが、董海川の経歴とともにその歴史はあまり詳らかではないようです。彼は清朝の肅親王に見出されて宮中の護院(警備)総官に任じられて名を挙げました。後に楊露禪もこの護院に入り、董海川とも立ち会ってともにその強さを認め合ったというエピソードが残されています。

八卦掌は**尹福**や**程廷華**などに伝えられました。**尹福**(1841~1909)は董海川のあと宮中の護院(警備)の総官を継いでいます。程廷華(1843~1900)は尹福と並ぶ高弟でしたが、義和団の乱のときに、ドイツ軍による虐殺や放火、略奪に憤慨して、(彼は義和団員ではなかったのですが)、単身ドイツ軍と闘って命を落としています。

現在、太極拳、形意拳、八卦掌の三派を総称して**内家拳**と称していることはご承知のとおりです。

5) 意拳

形意拳の郭雲深に師事した**王郷齋**【**王向齋**】(1886~1963)は、若くして実戦派として北京で頭角をあらわし、1913年には一時**中華民国**大統領となった袁世凱にも認められ陸軍省の教練所所長となり、当時の各流派の名人、達人を教師に迎えたことでさらに名を上げました。

のちに、形意拳の**三体式**から、王式の**站樁功**を工夫し、そのみを修行していっさいの套路を廃した**意拳**を創出しました。「自分の平衡を保つ力さえ養われれば、後は実際の状況に応じて動ける(つまり套路は不要)」「養生と拳術はひとつ」「人体、臓腑のバランスを回復すれば病気は治る」という理論を展開して、養生気功の分野でもおおいに活躍しました。

1930年、44歳のとき上海で、欧米のボクサーや、日本の柔道家**八田一朗**(後のレスリングチャンピオン)が挑戦しましたが、まったく相手にならなかったというのが、敗れたほうの証言として残っていますので彼の拳は本当に強かったのでしょう。

すでに日中間は不穏な関係にあったのですが、あえて日本人の武術家**沢井健一**(1886~1963)に意拳を伝授し、沢井は戦後の1947年に王向齋の許可を得て日本で「**太氣拳**」を創設しました。沢井が極真空手の創始者**大山倍達**はじめ多くの武術家に影響を与えたことは大変有名です。【以下次号】